

11月19日より、新しい企画展示「山脇百合子の仕事部屋」展が始まりました。今回の企画展示では、挿絵画家である山脇さんの仕事部屋を再現しています。「ぐりとぐら」シリーズをはじめとして、たくさん絵が生み出された場所であり、ご本人の好きなもの、おもしろいと思ったもの、大切にしていたことに触れることができる場所でもあります。大変な読書家だった山脇さんの本棚も雰囲気そのままだとご覧いただけます。

この企画展示に併せて、映像展示室「土星座」では美術館オリジナル短編アニメーションの「くじらとり」と「たからさがし」をひと月ずつ交互に上映します。映画の原作である『いやいやえん』『たからさがし』（福音館）は、山脇百合子さんとお姉さんである中川李枝子さんの作品です。このお話を元に、子どもたちが生まれて初めて観るに値する映画を作ろう、と制作されたアニメーションを、本とともに楽しんでいただくと嬉しく思います。



季刊トライホークス 2025年 | 81号
発行日……2025年12月2日 | 発行人……中島清文
発行所……徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館
編集……石光紀子 小泉奈里子 | デザイン……川島弘世
印刷……TOPPANクロレ株式会社 | 非売品

本棚より

トライホークスに置かれているおすすめの本を紹介しています。
トライホークスの本棚の一冊から、みなさんの本棚の一冊にいただけたら嬉しいです。

小さい牛追い

ルウェーの農場に住む4人兄妹、10歳のオーラ、8歳のエイナール、そして妹のインゲリドとマルタは、両親と一緒に夏の間、山の牧場で牛の世話をして暮らします。この夏、オーラとエイナールは初めての牛追いをするようになりました。暴れん坊の牛もいれば、気のいい牛もいます。雨の日も風の日も20頭の牛にしっかり食べさせて、連れて帰ってこなければならぬ大変な仕事です。

私が『小さい牛追い』を読んだのは、中川李枝子さんが「この本が本当に大好きなの」とお話を聞いているのを聞いて、これは読まねばと手に取ったのが最初です。山脇百合子さんも好きな本としてこの本を挙げられていて、お母さんが牛の乳しぼりをしている時に、インゲリドが牛のしっぽを動かさないように持っている場面や、農場の子どもたちの暮らしぶりが本当におもしろくて、お話も絵も何度も読んだとお話されていました。「どの絵も読まずにはいられない」という言葉に、挿絵をじっくり見ながら読み直したのが2回目です。

以来、何度もこの本を手にとってきました。続編の『牛追いの冬』には、秋が過ぎ冬を迎えた農場での出来事が描かれています。楽しいクリスマスやボーイ・スカウト、わくわくすることがいっぱいです。このお話は作者のマリー・ハムズンの子どもたちがモデルになっているそうです。今から100年ほど前、外国の農場での暮らしが興味深いのはもちろんですが、子どもたちの責任感やプライド、思ったこと、感じたことが丁寧に言葉にされていて、子どもの頃に自分が感じたことを思い出させてくれます。読むたびにおもしろさを見つけられる本です。



小さい牛追い
作…マリー・ハムズン
訳…石井桃子
岩波少年文庫 748円

牛追いの冬
岩波少年文庫 836円

堀川理万子

Horikawa Rimako

ひとりで ぐるぐる考える

本を紹介していただいたのは、画家であり、絵本作家である堀川理万子さんです。堀川さんの『いま、日本は戦争をしている』は、太平洋戦争中、子ども時代を過ごした方たちの体験をまとめた本です。堀川さんはこの作品作りを「記憶の風景に近づけていく作業だった」とお話されていました。文章はもちろん、絵によって語られるこの本を、この機会に手に取って、じっくりご覧いただきたいと思います。



* * * * *

『点子ちゃんとアントン』

いとこの家から、どさ一とお下がりの本がわがやへ届いたことがありました。小学校1、2年の頃です。その中にあった一冊が、『点子ちゃんとアントン』。「点子」という名前が、おもしろくて、しかも、ドイツ人なのに「なんで日本語の名前?」なんて、ひとりごとでつつこみを入れながら、繰り返し読みました。

この本を読むと、いつも一番うれしいのは、子どもは、すぐく勇気があって、いいものとして描かれていること（ケストナーの子どものための作品はすべてそのように描かれていることを後から知りました）。読んでみると、毎回、「子どものこと、わかってるなあ、くふふ」と喜びがわいてきます。

点子ちゃんの生意気ぶり、無頓着さ、大胆さ、優しさにうっとりで、そして、アントンの賢さ、あたたかさ、謙虚さを尊敬していました。お金持ちで、夜はお出かけが多くて、点子ちゃんをほったらかしのパパとママですが、点子ちゃんをととても大切に思っていることが、最後にわかります。

点子ちゃんは、夜になると、家庭教師のアンダハト先生に連れられて、橋の上でマッチを売っています。2人は、目の見えないお母さんとその娘

をよそおっているのです〈子どもだったわたしのひとりごと：いいなあ。わたしも、マッチを売ってみたい〉。また、女中さんのベルタ、犬のピーフケ、そんなふうに出てくる名前が今でも言えるんです。性格のぜんぜん違う点子ちゃんとアントンはなかよしで、その2人が、繰り広げる世界にわくわくするのです。

わたしは、いわゆるいい子ではありませんでした。お客さまの靴を隠したり、庭から道路に向けてホースでアーチ状に水をじゃーじゃー浴びせかけて、通行人から叱られて、舌を出しているような子どもだったのです。どうして、こういういわゆる「わるさ」にあらがいがたい魅力を感じてしまうのか、自分でもよくわかりませんでした。だから、元気いっぱいに自分を生きて、しかもフランスのいい点子ちゃんにあこがれていたのかもしれない。

ところで、わたしが読んでいたのは、岩波書店から出ている完訳版ではありませんでした。高橋健二訳というところは同じだったのですが、どうやら、少し短くした簡易版だったようなのです。挿絵も、トリアーのものではなく、日本人の画家が描いた絵でした。表紙に描かれた点子ちゃんの瞳がターコイズブルーで、きれいな色でした。もう少し大きくなって、完訳版を手にした時、トリ

アーの描く点子ちゃんが、ちょっとひよろひよろして大人っぽく見えて、印象が違った。もちろんトリアーの絵は、その美しい線が大好きなので、悪口を言っているのではありません。ただ、わたしの点子ちゃんは、いところからもらったあの本のターコイズブルーの目をした女の子なのです。

大人になって、わたしは、子どもの本に挿絵を描くようになりました。子どもの時、挿絵こそが読む喜びを加速させてくれるものであり、挿絵のあるページが現れるのがいつも楽しみでしたので、読む喜びの推進力になるような絵が描けたらな、と思って描くのは、子どものときの読書ゆえのことです。

『せむしのこうま』

ひじかたしげ 著

土方重巳の絵で、ボール紙でできていました。これは、幼稚園に入るか入らないかの、そんな幼いときに愛読した絵本です。最後には表紙がとれてしまって、中身だけになりましたが、それでも愛し続けました。

イワンは、気立てはいいのだけれど、さかさまに馬に乗ってしまったり、どじでのろまです。そのイワンが、物語の終盤、王さまのいいつけで煮えたぎるミルクの風呂に入ると、立派でかっこいい若者になります。逆に、なまけもので傲慢な兄たちは、そのミルク風呂に入って、熱さで死んでしまいます。イワンが王女と結婚してめでたしめでたし、となるロシアの民話なのですが、この絵本を読むたびに、熱いミルク風呂のことを考えました。そして、ミルク風呂から出てきたイワンの

服が濡れていないことに不思議を覚えました。また、生乾きの牛乳がほんと臭いことも気になりました。ハンサムになったイワンの顔もしげしげ見て、いったい、どんな魔法が起きたのか、そして、兄さんたちは死んで、イワンが生き残った上にハンサムになったわけをぐるぐる考えて飽きることはありませんでした。

点子ちゃんが日本語の名前である不思議も、イワンがミルクに濡れていない謎も、わたしは大人に聞くということは一切しませんでした。鼻歌を歌いながら、考えごとで1日が過ぎていくのを楽しんでいた気がします。ただ、少し、そのことをだれかに話してその不思議を分かち合っていたら、もっと楽しい展開があったかもなあ、と残念に思うことがあります。誰にも話さないことだからこそ、わたしだけの体験として、今でも記憶に残ることになっているのかもしれないね。

ほりかわりまこ

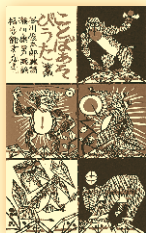
画家、絵本作家。絵本『海のアトリエ』（偕成社）でBunkamura ドゥマゴ文学賞、講談社絵本賞、小学館児童出版文化賞。『ひみつだけど、話します』（あかね書房）で坪田譲治文学賞。近作に、『いま、日本は戦争をしている―太平洋戦争のとき子どもたち―』（小峰書店）がある。絵画作品による個展を定期的に開催しつつ、200匹のめだかと渋谷在住。

トリアー ホークス の本

いま、日本は戦争をしている
―太平洋戦争のとき子どもたち―
絵と文…堀川理万子
小峰書店 4,180円



点子ちゃんとアントン*
作…エーリヒ・ケストナー
訳…池田香代子
岩波少年文庫 825円



ことばあそびうた
詩…谷川俊太郎
絵…瀬川康男
福音館書店 1,100円



ひさの星
作…斎藤隆介
絵…岩崎ひろ
岩崎書店 1,870円

◆せむしのこうま

絵…土方重巳
◇ボール紙で作られた絵本。出版社など不明

◆マヤの一生 椋 鳩十 名作選7*

著…椋 鳩十 理論社 1,980円

◆かみ舟のふしぎな旅

作…フェラミークラ 絵…カンデア 訳…中村浩三
偕成社 品切重版未定

◆大どろぼうホッツェンブロッツ

作…プロイスラー 訳…中村浩三 偕成社 1,320円

◆いちごばたけのちいさなおばあさん

作…わたりむつこ 絵…中谷千代子 福音館書店 1,100円

◆ふらいばんじいさん

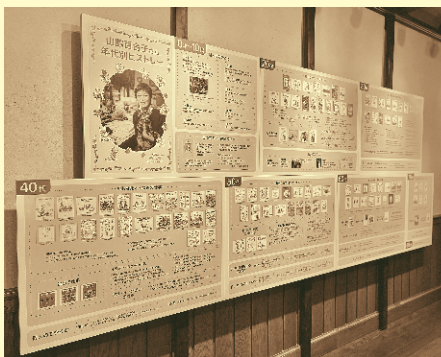
作…神沢利子 絵…堀内誠一 あかね書房 1,320円

* 印の書籍は、堀川さんが選んだ書籍タイトルをもとに、現在入手できる本を編集が選びました。



たくさんのお仕事

山 脇百合子さんの膨大な仕事を年代別にまとめた「山脇百合子さん年代別ヒストリー」を1階の廊下に展示しています。山脇さんは、1941年に東京都杉並区で生まれました。5人きょうだいの4番目、6つ上のお姉さんが中川李枝子さんです。高校生の時に中川李枝子さんの童話「いやいやえん」に挿絵を描き、この童話が一冊の本『いやいやえん』として福音館書店から出版されたのが1962年、山脇さんが大学生の時でした。以来「ぐりとぐら」シリーズをはじめ、たくさんのお本が世に出されました。中川さんとの共作をはじめ、多くの日本人作家や海外の邦訳作品にも挿絵を描いていらっしゃいます。「山脇百合子さん年代別ヒストリー」では20代、30代といったくくりの中で、挿絵の他、雑誌や広告のカット絵、翻訳、エッセイなど、多岐にわたっているお仕事を紹介しています。書籍化されたものは一冊ずつ表紙が載っていますので、懐かしい本に出会えるだけでなく、「こんな本もあったのか」と新しい発見を楽しんでいただけたらと思います。



1F廊下「山脇百合子さん年代別ヒストリー」パネル

山脇さんの描かれた絵は本当に愛らしく、ありふれた言葉かもしれないが、つつい「かわいい」と口にしてしまいます。チェックやストライプのお洋服、お部屋に飾られたリースや植物の鉢、みんなで一緒にお茶をしたり、ご飯を食べたり……。日常が丁寧に描かれた絵の中に、あたたかさ、やさしさがあふれています。企画展示室では山脇さんの画業について様々な角度から読み解いてきます。日

本と海外の作品それぞれの挿絵も展示していますので、キャラクターや作品の空気感の違いがどこからくるのか、動きやしぐさ、まなざしなど、一本の線から生まれる質感や表情を、ぜひじっくりご覧いただきたいと思います。また、今回の企画展示のために、現在販売していない絶版本も含めて、山脇さんが絵を描き、文章を書き、翻訳した「本」を可能な限り集めました。企画展示室で紹介できなかった本は、2階のギャラリーに展示しています。



2Fギャラリー。クリスマスの飾りつけをした本棚。展示している本は自由にご覧いただけます。

最後に書籍を一冊紹介します。おなじみ「ぐりとぐら」シリーズから『ぐりとぐらのおおそうじ』です。長い冬が終わったある朝、のねずみのぐりとぐらは窓を大きく開けて部屋の中をみわたしました。すると部屋の中はほこりだらけ！ほうきもはたきも使えなかったので、ボロ布をからだに巻き付け大そうじを始めます。注目していただきたいのはぐりとぐらのお部屋のカーテンです。山脇さんの仕事部屋には同じ柄のカーテンがかけられていて、企画展示室内の仕事部屋でも再現しています。『ぐりとぐらのおおそうじ』をすでに読んでいる方は多いと思いますが、ぜひもう一度絵を見て、仕事部屋をご覧いただけたらと思います。



ぐりとぐらのおおそうじ

作…なかがわりえこ
絵…やまわきゆりこ
福音館書店 1,100円